

[資料]

## 多文化共生の視座に立つ絵本の再評価 ——多文化共生教育に活用する絵本の基礎的研究として——

松本由美

### 要 約

現代の世界的な潮流の一つである多文化共生は、絵本の今日的なテーマの一つでもあり、その潮流に乗った絵本の出版も盛んである。その一方で、ロングセラー絵本と呼ばれる長年読み継がれる絵本も数多く存在する。そこで本稿では、多文化共生の視座に立ち、出版年に拘わらず数多く読まれる絵本を多文化共生の視座に立った再評価を試みたい。特に幼小連携教育において、多文化共生の問題を意識し、解決に向け思考を深めるきっかけとなり得る絵本の評価機軸を構築する礎としたい。

キーワード：多文化共生教育、絵本、文化的バイアス、ユニバーサリティ

### 1. はじめに：多文化共生の視座の必要性

我が国でも、出入国管理及び難民認定法（以降、入管法と記す）の改正（1990年）を契機として、外国人労働者が増え始め、それに伴い彼らが集住する地域では、その子弟の公立学校における言語的異質性による問題が生じ始めている。特に外国人労働者を数多く雇用する企業がある自治体では看過できない問題になっていて、多文化共生社会の構築は、こうした問題を抱える自治体が主導で始まった。一方、文部科学省は入管法改正の翌年である1991年から「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」を開始している。2016年に行われた同調査によると「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒は34,335人（29,198人）で前回調査より5,137人〔17.6%〕増加」している。地域別の統計で群を抜くのは愛知県、次いで神奈川県、東京都、静岡県、大阪府、三重県、と続く。文部科学省はこうした状況を踏まえ、外国人の受入れ・共生のための教育推進検討チームを立ち上げ2019年には「日本人と外国人が共に生きる社会に向けたアクション」の中で、「学校におけるきめ細かな指導体制の更なる充実 ①学校における教員・支援員等の充実・多言語化への対応（多言語翻訳システムの活用、遠隔教育の充実） ②教員の資質能力向上・指導者派遣の仕組みを構築し、全国的な研修機会を確保多

言語対応」などを上げ、こうした日本語を母語とせず、日本の公教育における日本語を使った学習に苦慮する子供達、の児童への対応を強めている。

一方こうした子供達を受け入れる側の日本の子供達の在り方については、文部科学省は国際理解教育の中で、多文化共生に言及している。すなわち：

「ものごとの規模が国家の枠組みを越え地球規模で拡大し、国際的相互依存関係の中で生きる現代人には、一人一人が、国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、国際社会の一員としての責任を自覚し、どのように生きていくかという点を一層強く意識する必要がある。求められているのは、個人が相互理解に基づく多文化共生という視点をもち、国家の枠組みを超えた国際社会の一員として自己を確立し、発信を行い、主体的に行動できる人材である。」(文部科学省2005『初等中等教育における国際教育推進検討会報告 ー国際社会を生きる人材を育成するためにー』第1章 国際教育の意義と今後の在り方』傍線は本稿筆者)

上記2つの方針 ー一つには海外から移り住んできた日本語を母語としない子供達に対しては、多文化共生と称する日本語や日本の文化を教えること、他方、日本人の子供に対しては国際理解教育の一環として多文化共生の視点から学ばせることー は言語を含めた文化のバイアスに拠る文化のマジョリティの上に立脚した方針のみが打ち出されていると、改善の余地があることを指摘しているのが、日本学術会議による提言(案)「教育における多文化共生」である。この提案では「グローバル時代にあって、マジョリティは固定したものではなく、日本人児童生徒も将来において、海外に出かけてマイノリティになってしまうこともある。日本の中においても外国人がマジョリティである会社に就職しないとも限らない。児童生徒が、地球市民として生活習慣や言語の違う人びとと共に暮らすことについて、ある程度の理解を得、想像力を養うことは重要である。文化の異なる人びとも接し、暮らして行くことができる初歩的な手ほどきをするのは、多文化共生教育の重要な役割であり、それがグローバルな環境で生き抜く力をつけるのである。」(日本学術会議 地域研究委員会 多文化共生分科会 2014)と、相手の文化を自国の文化と同等の価値があるものとして尊重し、対等な立場で地球市民として生きること、真の意味での共生を目指し、教育システムを構築することを提案している。

自国の将来を背負う子供達を、自国の外を想像することができない井の中の蛙にさせないことは大人としての責務である。また、この提案にも書かれているが、先のデータから見ても、外国人が集住する地域や、外国人労働者が多数を占める職場や学校においては、自国の中においても、日本人も数量的マイノリティにはなり得ることは想像に難くない。今や、自国に留まる子供達にとっても、マジョリティ、マイノリティという二項対立的な価値観に立脚するのではなく、互いに尊重し合う多文化共生の視点に立った、地球市民感覚を身に付けさせることが重要である。現代の子供達は地球規模で将来を生きることになるのは自明であるから、地球市

民としての日本人というアイデンティティを形成することが必須であるし、こうした感覚をできるだけ早くから醸成するに越したことはない考える。

しかしながら、未だアイデンティティ形成の途上にあり、文化的アイデンティティを持たない子供達に、国の内外を問わず文化というものを想像させ、感じさせることは容易ではない。そこで小学生を中心に義務教育段階でも、絵本というメディアを使って多文化共生教育を行うプログラム構築してみたいと考えている。本稿では、そのプログラムに使用する絵本選定基準を立てるための基礎研究として、絵本のサンプリングとその再評価を行いたい。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章では先行研究として絵本を使った多文化共生教育の試みを紹介し、本研究で目指す多文化共生の枠組みを規定したい。第3章では、今回サンプリングした比較的長く読み継がれた絵本について、子供の認知発達と関連付けて多文化共生教育に生かせるかどうか再評価したい。第4章では、引き続き研究をするにあたって中間まとめを行う。

## 2. 先行研究：絵本を用いた児童期の多文化共生教育の可能性

まず、絵本、多文化共生という2つのキーワードで論文検索をかけると静岡県、三重県に在籍する研究者の論文が多く検出される。どちらも外国人労働者を多く擁する自治体であり、先の日本学術会議の提言（案）「教育における多文化共生」でも述べられている通り、外国人労働者がより多く集住する地域の自治体ほど、多文化共生教育に力を入れてきたことを示す証左になろう。最初に、静岡県浜松市において、静岡県立静岡文化芸術大学が束ねる多文化共生教育の活動のプラットフォーム「多文化子供教育フォーラム」の第5回絵本プロジェクトを紹介したい。

### 2.1 「浜松市における多文化子ども教育フォーラムとバイリンガル絵本プロジェクトー移住第2世代の活躍に焦点をあててー」（池上重弘2014）

浜松市は日本で一番ブラジル人が多く集住する地域（池上2014）であり、文部科学省が行う調査報告「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」の結果について」（文部科学省2017）によると、2016年現在の静岡県全体の日本語を不自由としている児童は1,739名に上る。自治体としても、こうした状況を重く見て、ブラジル人を含め、外国人労働者を保護者とする児童について何らかのサポートをする取組も盛んに行ってきたそうである。しかし、こうした取り組みは、複数のボランティア団体が個々に活動を行っており、連携したサポートができていないところが問題であった。また、児童に対するサポート活動の横の連携のみならず、児童が学校生活に馴染むためには、保護者のサポートが欠かせないため、児童のサポート活動と保護者のサポート活動を連携させることも必要になる。こうした個々の活動のプラットホームになるべくして誕生したのが、先に述べた静岡県立静岡文化芸術大学が

多文化共生教育の活動を束ねるプラットフォームとして主催する「多文化子供教育フォーラム」である。(池上2014)

中でも、2013年に第5回フォーラムとして行われたバイリンガル絵本プロジェクトは、絵本を対面や訪問を含む直接配布することによってコミュニケーションをとること、さらに訪問配布の際、了承を得たうえでブラジル人家庭に聞き取り調査を行える仕組みを工夫したものである。バイリンガル絵本は、静岡県立静岡文化芸術大学の日系ブラジル人学生が卒業研究で制作したブラジル人児童向けの学校生活の案内冊子『浜松の公立小学校』である。まず、浜松市教育委員会の協力を得て増刷し公立小学校に配布し、さらにブラジル人児童のいる家庭に、先の調査を行ったそうである。

このバイリンガル絵本は、『浜松の公立小学校』という題名からわかるとおり、浜松の公立小学校案内となっており、文具や給食に必要な衣服など公立学校で知っておくべき事項の絵、名称（ポルトガル語と日本語）が書かれている。この絵本の作者自身が日系ブラジル人として小学校生活を経験した際の、児童の目線から書かれたものである。したがって、児童にとっても秀逸なガイドブックであるし、ブラジルから来た第一世代である保護者にとっては、自身の子供がどんなものを必要とするのかが良くわかることが紹介されている。しかし、こうした、懇切丁寧なフォローアップを行っていても、ブラジル人学生たちが訪問時行った調査によると、子供の進学に向けての心配、奨学金制度などの情報が得られていないことによる経済的不安、保護者自身が教科書や授業で使われる学習言語を理解できず家庭学習のサポートができない、行事への参加の仕方が分からない、そしていじめの問題が保護者からあげられたそうである。

本稿では、紙幅の関係で池上(2014)の紹介はここまでにとどめるが「多文化子供教育フォーラム」の第5回絵本プロジェクトの報告からわかることは、二点ある。一つ目は、これらの小学校における習慣や決まり事、必要な物品、とそれらを表すことばが分かればよいわけではないことである。もちろん多文化共生すべき社会においては、通常既に外国人労働者が集住しており、文化構造の二重化を防ぐために、先ずは衣食住や言語や習慣や規範などの相互理解を目指すことは喫緊の課題であろう。しかし互いの文化を理解しようとする姿勢の根底には、互いに相手への尊敬の念を持つ精神性、そして共生社会に向けて双方が努力する態度形成こそが重要であり、物的文化交流を入口とするも、そこにとどまっていはいけないことが分かる。二つ目は文化の落差を作らないことが、多文化共生社会の構築に重要であることである。これまで述べてきたように、経済格差を文化に反映し、マジョリティ対マイノリティという二項対立からは、互いを理解したとしても共生社会は生まれない。この日系ブラジル人学生の絵本を通じて、ブラジル人が日本の文化を理解すると同時に、日本人の児童も、同じバイリンガル絵本を通じてブラジルの文化に興味と理解を示し、共生しようとするものが求められるし、周囲の大人が他者の文化に興味を示し、受入れ、日本人児童を共生に導くことが重要であると考える。後者においては、教育、特に初等教育の責任は重大である。

## 2.2 「児童のための異文化コミュニケーション環境」(高崎俊之 2017)

では、どのように児童に多文化共生教育を設計するのが良いのであろうか？ 多文化共生教育をキーワードにした研究はまだ多くないようなので、異文化コミュニケーションをキーワードにした研究から「児童のための異文化コミュニケーション環境」(高崎2017)に発表されている児童にふさわしい異文化交流型を参照したい。高崎(2017)では児童にふさわしい異文化コミュニケーションを①交流型コミュニケーション、②共同作業型コミュニケーション、③知識伝達型コミュニケーション(丸数字は本稿筆者付与)の3つに分け、解説している：

### ①交流型コミュニケーション

交流型は、異文化の児童間で日常生活を素材とするコミュニケーションであり、姉妹校交流や文化友好事業など、児童同士が対等な立場で友好関係を築くためのものである。交流型では、児童間の言語の差異が問題となる。既存の事例においては、英語など単一の言語を共通言語として用いる場合が多いが、児童間に共通言語の習熟度に差異がある場合には、言語習熟度の高い児童が優位な立場となり、対等な関係が損なわれることがある。そこで本研究では、「異言語の相手との対等な関係性の構築」を第一の設計指針とした。また、友好関係の構築を促進するために、「好意的な情感伝達の実現」を第二の設計指針とした。

### ②共同作業型コミュニケーション

共同作業型は、チーム内での議論を通して共通目標の達成を目指すコミュニケーションである。共同作業型においては、参加する児童がチーム内で平等な発言機会を得られることが望ましい。しかしながら、児童による悪意な文字列の連続投稿により議論が阻害される問題や、チーム内で発言の少ない児童が共同作業から疎外されるという問題が生じやすい。そこで、誤りに気付かせることによって自己修正行動を促すというモンテッソーリ法の教育概念を設計指針とした。

### ③知識伝達型コミュニケーション

知識伝達型は、言語の差異に加えて知識の差異が特徴となるコミュニケーションである。伝達する知識に対して高品質な翻訳が要求されると共に、児童の未熟な言語能力に起因する問題に対応する必要がある。

(高崎2017)(丸数字と小見出しは本稿筆者付与)

上記の異文化コミュニケーションタイプのいずれにおいても、絵本をコミュニケーションメディアとして活用することは可能だが、本稿では、中でも①交流型コミュニケーションに絵本を活用して多文化共生教育を行うという前提に立ち、そこに使用する絵本の選定を行いたい。



## 2.3 幼児期・児童期における多文化共生教育の重要性と絵本の活用

### ①地球市民としてのアイデンティティ形成を目指す

絵本の読み聞かせを行うような年代にこそ、多文化共生の素地を作ることが重要に思える。なぜなら、一般的に考えて、既に形成された自身の価値観を捨てることは容易でないからだ。もし、そうなら自身のアイデンティティが形成されつつある年代から、ある特定の文化集団に属すると自覚する前の年代にある幼児や、小学校の低学年の児童にこそ、多文化共生教育が有効なのではないだろうか？ 本研究では、アイデンティティが確立する時には、他者を受け入れる、尊重する姿勢が備わっている地球市民としての日本人が生まれる多文化共生教育体制でありたいと考える。

また、凡そ偏見と思わしき文化に対するバイアスは、決して生得的なものではなく、周囲の大人の価値観を刷り込まれるのであろう。これを逆手にとって、バイアスが形成される前に、絵本など幼児、児童にも伝達可能な媒体を使って多文化共生を助ける素地を築くと良いのではないだろうか？ また、こうしたバイアスによって引き起こされる社会問題も幼児や児童にも無関係ではない。ここには、近年のこども観の変化も見られる。

### ②偏見に捕らわれない文化の公平性を身に付ける

どんな形にせよ外国人労働者の受け入れ国は、外国人労働者を送る国々より経済的には豊かであり、長い間、経済の優位性が文化の優位性に結び付けられがちであった。しかし、近年はアメリカ国内での人種差別問題に対する抗議運動が#BlackLivesMatter (BLM) として世界的に広がったり、学生環境活動家であるグレタトゥンベリ氏の活動が世界中の特に若者を巻き込んだり、差別されてきた人々、若者や女性といったいわゆる弱者が、声を上げる大きなうねりのようなものが感じられる。また、2015年に国連サミットで持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) が定められたことによって、多様性を認め合い不公平をなくすという考えが社会の様々なところに浸透してきている。こうした動きは文化の主張と密接に関わり、それぞれの文化が勃興し始めている。

### ③幼児・児童の多文化共生教育の媒体としての絵本

こうした社会情勢の変化は絵本出版にも及び、松本 (2021) で述べたように、これまで子供達に直接語り掛けられなかった人種差別や性の多様性やジェンダーに関わる差別、環境問題や経済的貧困などは、既に子供達を取り巻く問題として絵本に表されている。こうした問題を子供達に伝えるために絵本を媒体とする理由として、絵本の特性と結びつけて「絵本という媒体は、真実を損なうことなく、こどもを主人公にして情報を物語化することにより、こどもたちに情報を伝わりやすくする物語と、情報を作家の目を通して視覚化して、真実をより訴えやすくすることが可能な絵」という二つの媒体を複合的に併せ持つ媒体であるからだ。」(松本

2021)

### 3. 幼児・児童の多文化共生教育に用いたい絵本

ここで、具体的な絵本作品を評価してみたい。本稿の目的は多文化共生教育に用いる絵本のリスト化ではなく、その前段にある選定基準つまり評価の観点を洗い出すことである。多くの絵本を取り扱うことはしないが、指標となるような絵本を取り上げたい。さらに論題にもあるように、本稿のもう一つの目的は、ロングセラー絵本と呼ばれる長く読み継がれてきた絵本を、多文化共生教育の観点から再評価することである。時代の変化とともに、絵本の出版傾向も変わるが、長く読み継がれた絵本の中にも、時代のコンテキストに沿って再評価されるべきものがあるはずである。変化の激しい時代にあるからこそ、人間の普遍性を包含する絵本を再評価しておきたい。

本稿では新たな試みとして、多文化共生教育に必要ないくつかのテーマごとに、そのテーマを直示的に扱った多文化共生が話題になるようになった概ね2000年以降に出版され何らかの形で評価を得た絵本と、それ以前の出版後約20年を経たロングセラー絵本と呼ばれるものから、同じテーマを暗示的に包含すると思われる絵本を取り上げ、対にしながら評価してみたい。

#### 3.1 多様な個性を認めること・自己肯定感

『くれよんのくろくん』なかや みわ作・絵 童心社（2001）

新品のまま使われることなく、クレヨンたちはある日ついに外に飛び出し、画用紙と出会って絵を描き始める。最初に飛び出した黄色のクレヨンが蝶々を描くと、「そうだ。チョウには、おはながひつようだね」と黄色いクレヨンに呼ばれる赤いクレヨンとピンクのクレヨン、お花には緑の葉っぱが必要だと呼ばれる緑のクレヨン、そんな中、いつまでも出番のないのは黒のクレヨン。疎外感を味わうくろくんのところにシャープペンのお兄さんがやってきて、己の個性を認め活かしていくことの大切さを話してくれる。そうして、くろくんはついに見事な活躍を見せる。

作者のなかやみわ氏は、このシャープペンはクレヨンに見立てた子供達を互いの個性を認めることに導く大人であり、くろくに疎外感を味合わせてしまったクレヨン責めることなく仲直りさせていく、そんな対応が大切であると、次のように述べている。

子どもたちがグループでいると、大なり小なりトラブルが起きると思うのですが、それを子どもたちだけで解決するのって、かなりレベルが高いんです。そんなとき、だれか大人がアドバイスをしてあげることによって、問題が解決することってよくあると思うんです。ただし、的確なアドバイスでしっかりと誘導できないといけないんですけどね。シャープペ

ンのおにいさんは、仲間外れにされたくろくんを慰めつつ、誰も責めないやり方で、くろくんたちを仲直りさせます。

私たち大人も、機転を働かせ子どもたちのトラブルを解決しましょうという、大人へのエールとメッセージを込めているんです。

(絵本ナビスペシャルコンテンツインタビュー 2015.11.19)

自分だけの「くれよんのくろくん」絵本ができる！

『くろくんたちとおえかきえんそく』なかやみわさんインタビュー

子供達へのメッセージだけでなく、それを読み聞かせる大人へのメッセージが込められていることは注意に値する。このことは後に考察したい。

『A Color of His Own』Leo Lionni 作・絵 Dragonfly Books (1975)

“Prots are green, goldfish are red, elephants are gray, pigs are pink. All animals have a color of their own—, except for cameleons.”(カンマは改ページを表すため、本稿筆者による挿入)とシンプルでパラレルな文体で始まるカメレオンのつぶやきは全ての動物に固有の色があるのに、カメレオンは行く先々の物に体色が変化してしまう。いったい自分は何色なのか？と嘆き続ける。気持ちも体も暗黒に閉ざされた冬を過ごしたカメレオンは、春の訪れと共に、もう一匹のカメレオンに出会い、体色が変わることが個性であり、カメレオン同士一緒に居れば同じ色に変われる喜びを、教えられる。詩歌のようなシンプルな美しさを呈する文体と、見事にマッチする美しくかわいらしい描画は、スタンプングという消しゴムハンコのようなスタンプを作成し、インクの色を変えれば形を変化させず、色だけ変えられるという手法を用いている。体色の変化するカメレオンにふさわしくもあるが、スタンプを押すことで生じるインクの滲みや、擦れや、微妙なずれによる色ムラが、一見鮮やかに見える彩色の、明度を保ったまま、彩度を落として、目に刺さらない色に抑えるのに、一役買っている。また、仲間のカメレオンと行動を共にする見開きでは、スタンプングによって、同じ形を出すことができ、同一性を強調しているが、さらにスタンプを少しずらしながら重ねたり、線対称にしたりすることで、スタンプングの単調になりがちなデメリットを上手く避けていて、秀逸である。

この作品では、先の『くれよんのくろくん』に登場したシャープペンシルの役目を果たすのは、春先に出会うもう一匹のカメレオンである。

### 3.2 差別することに陥りがちな見方を変える

『おばあちゃんとバスにのって』マット・デ・ラ・ペーニャ作 クリスチャン・ロビンソン絵 石津ちひろ訳 鈴木出版 (2016)

主人公のジェイは教会の帰り、おばあちゃんとバスに乗って出かけます。友達は車で帰るの



に自分は雨の中、バス停でバスを待つこともちょっと不満なジェイ。でも、おばあちゃんの言葉が、ジェイの心も、周りの人々の心をも解きほぐし、ふんわりと包み込んでくれます。

バスの中で全盲の人を見て「なににも みえないって、たいへんだろうな」とつぶやくジェイをおばあちゃんが凜として論す：「あらなににいてるのジェイ。めがみえなくなつて、みみでもちゃんとみられるのよ。」目が見えないその乗客が鼻でだってみられることを告げてくれるのも、素敵なやり取りである。おばあちゃんは、ジェイを連れて、毎週ボランティア食堂にお手伝いに出かけるのであったが、そんな道中の一コマである。気負わず、さりげないやり取りの中に、ほんの少し見方を変えることによって、豊かになる生き方があることを教えてくれる。イラストのようなデフォルメされた描画は、無駄のない線でにこやかな表情、互いに向き合う体幹や横顔を優しく描き出している。また、肌の色、髪形や髪色、性別等過疎絵あげればきりが無い、多様性を一台のバスの中に縮図のように描きながらも、おばあちゃんの観方考え方を反映した、バスの中の和やかな雰囲気を出し出しすることにより、多様性を肯定的にとらえる作家の価値観を表現している。

原作は出版当初から評判を呼び、優れた児童文学に与えられるニューベリー賞と、絵本作品に与えられるコルデコット賞オナー賞を2016年に受賞している。本稿で紹介した邦訳は産経自動出版文化省の翻訳作品賞を2017年に受賞している。

ここでは、ジェイを導いてくれる大人はもちろん、おばあちゃんである。

『ゆきのひ』 エズラ・ジャック・キーツ作・絵 きじま はじめ訳 偕成社 (1969)

朝、目が覚めると外は一面の雪。雪国の子供ならずとも、一夜にして銀世界に変わった風景はまるで魔法にかかった世界のように息をのむ。主人公のピーターは一人外に出て、雪だるまを作ったり、一面の雪に足跡をつけてみたり、飽きることがない。そんな誰しも子供のころに過ごしたことがある雪の日の一日を、エズラ・ジャック・キーツがみずみずしい感性で描いている。コラージュの手法を使った文様や彩色をあえて白銀の世界に投入したキーツの描画は、見る者の目を奪って止まない華やかで万華鏡を見ているような美しさである。この主人公のピーターは、『ピーターのくちぶえ』『ピーターのいす』『ピーターのてがみ』の連作に登場する。妹が生まれて愛着を持ったものを譲るときの葛藤や、友達に上手く気持ちを伝えられないもどかしさ、といった、幼少期に誰しもが経験する成長過程の一コマが切り取られている。そしてこの絵本は、主人公のピーターとその家族を、有色人種として描いたことでも、注目された。現代に比べるべくもない人種差別の激しい時代に在って、少なくない読者がピーターの肌の色を見て驚いたであろう。そして、そんな読者に、子供の日常は人種を問わず同じなのだと、キーツはそっと告げたかったのかもしれない。

これらの連作に登場する大人は、ピーターを温かく、愛情深く慈しむピーターの両親である。ピーターが様々な葛藤を経て、成長していくのを見守り、そっと手を差し伸べている。

エズラ・ジャック・キーツは1963年に『ゆきのひ』の原作『The Snowy Day』でコルデコッ

ト賞を受賞している。

### 3.3 多文化共生教育に使いたい絵本の暫定基準

子供の成長を見守り、導く大人の存在

現代絵本の傾向を特徴づけるキーワードの一つが「多様性」であることに異論はないであろう。そもそも絵と文字というテキストの多重性、また二つのテキストの相乗効果を考えれば、絵本は実に多面的なメディアであり、その表現手法だけでも実に多様である。そこに近年の子供を社会の一員として認める子供観の変化は、かつては大人社会のものとして考えられていた社会問題をも絵本のテーマとして取り上げる風潮をもたらしした。しかし、本稿で取り上げた4つの作品に共通する一つの要素は、大人の導きであった。成長過程にある子供達には、当然のことながら大人の見守りが必要である。これらの絵本の中には、大人が愛情を持って子供達を見つめ、見守る姿勢が通底していた。

そもそも絵本は、まず大人が読んで聞かせることを前提として作られているので、当然のことながら、大人も一緒に絵本に描かれる物語世界を経験する。その中で、物語内の大人の視線が読んで聞かせている大人自身の視線と、自然に同化していけることが、一つの特色、基準にはならないだろうか。数多くの作品を分析して、再検討してみたい。

テーマの普遍性と重層性

本稿で取り上げた4作品に共通するもう一つの特徴は、普遍性と多重性である。たとえば3.1多様な個性を認めること・自己肯定感でとりあげた『くれよんのくろくん』は、クレヨン同士の関係性のこじれを経て、取り戻した友人関係をテーマとしているとも言えるし、同様に『A Color of His Own』ももう一匹のカメレオンとの友情と考えられなくもない。人間の生きる日常は複雑な価値観で構成されているのと同様に、それを昇華して仕上げる絵本に描かれる物語世界も同様に、一つの切り口だけで語られるものではない。重層的でなければ人の心に訴えるリアリティを持たないと言えよう。

そして、重層的であれ、そのテーマの一つひとつが普遍的でなければならない。3.2差別することに陥りがちな見方を変えるの項目で取り上げた、『おばあちゃんとバスにのって』も『ゆきのひ』も油断すると陥りがちな偏見というテーマを内包している。どの時代にあっても、どんな場面に在っても、陥りがちな偏見は残念ながら普遍的なテーマである。しかし、こうしたことを咀嚼された形で子供達に伝えるのは絵本の重要な役割であろう。

そしてまだ文化的バイアスを持たない子供達より寧ろ大人の方が、これらの絵本作品から得るものが多いのかもしれない。本稿第2章で観たように、大人の価値観が子供達の社会に投射されていることも決して少なくないのだから、大人がまず他者を認めて、受入れ、共生していくことも重要なのである。多文化共生教育に使用したい絵本はここでも、大人の関与が重要に

なる。

#### 4. まとめと今後の展望

本稿では、第2章で多文化共生、および、異文化コミュニケーションの分野から先行研究を調べ、多文化共生教育を絵本を使って児童に行う意義を確認した。第3章では、本研究の基礎となる、多文化共生教育に使える絵本を出版年の新しいものと、20年以上読み継がれているロングセラー絵本と呼ばれているものから、対にして分析して、選定基準につながるような特徴の洗い出しを試みた。

選定基準を構築するために、さらに多くの作品分析を行い、並行してこれらの絵本を読み聞かせる実践を行って、多文化共生教育のプログラムも構築していきたい。

#### 参考文献・資料

- 文部科学省（2016）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」  
池上重弘（2014）「浜松市における多文化子ども教育フォーラムとバイリンガル絵本プロジェクトー  
移住第2世代の活躍に焦点をあててー」  
高崎俊之（2017）「児童のための異文化コミュニケーション環境」京都大学博士論文
- 絵本ナビスペシャルコンテンツインタビュー 2015.11.19  
自分だけの「くれよんのくろくん」絵本ができる！  
『くろくんたちとおえかきえんそく』なかやみわさんインタビュー  
<https://www.ehonnaui.net/specialcontents/>（2022年1月1日アクセス）

# Research on Picture Books for Multicultural Education for Elementary School Students

Yumi MATSUMOTO

## Abstract

Multicultural education should be introduced into elementary school students, which has to be done before cultural bias is formed within inner mind. And picture books are expected to be utilized in such a multicultural education.

**Keywords:** multicultural education, picture books, cultural bias, universality